

---

---

◆◆◆ 編 集 後 記 ◆◆◆

---

---

平成9年に臨床教育実践研究センターが発足して以来、今年度で21年目となりました。平素よりご指導、ご支援をいただいております皆様方のお力添えに、深く感謝申し上げます。

今号では、二つの特集を組んでおります。一つ目の特集では、平成28年度に開催いたしました、当センター主催の第20回カレント教育講座のシンポジウム抄録を掲載しております。第20回のテーマは『「心の教育」を考える—発達障害の理解と対応—』であり、70名以上の方が参加されました。シンポジウムでは、臨床心理士、精神科医師、小学校教諭といったそれぞれの立場から「発達障害の理解とその対応」に向き合っておられる先生方よりお話をいただき、大変興味深い内容となりました。二つ目の特集では、大学院生が自主的に行っている精神分析研究会の企画で、Jan Abram先生、北山修先生、岡野憲一郎先生の3名の先生による『「甘え」について考える』のシンポジウム抄録です。英国精神分析協会訓練分析家・スーパーヴァイザーであるJan Abram先生には、平成28年度の当センター客員教授としてお越しいただきました。大学院生に向けた集中講義においても大変刺激的なご講義をいただいておりますが、『「甘え」について考える』のシンポジウム抄録ではさらに発展的に、興味深い議論がなされています。

さらに、当センターの活動報告として、公開講座抄録「母子関係と創造性—ウイニコット理論から『受胎告知』を理解する—」を掲載しております。こちらもJan Abram先生による公開講座の講演内容となります。「受胎告知」の場面が描かれた宗教画、そのテーマについて解説がなされながら、精神分析をはじめとした心理臨床実践において、セラピストとクライアントとの間に起こっていることとの共通性について論じられています。これらの報告や抄録、研究論文を通して、当センターの多様な活動の一端を感じていただければ、幸甚に存じます。

当センターも設立から21年目となりますが、当初から変わらずにあるのは、心理教育相談室での活動を基礎に置き、日々の臨床実践を大切にするという姿勢であるように思います。現在、心理臨床を取り巻く環境は大きな変化を迎えつつあります。そうした状況の中でも、目の前の実践を大切に、真摯に取り組んでいく姿勢を保ち続けていきたいと思っております。

皆様方には、本紀要について忌憚のないご意見、ご感想をお寄せいただければ幸甚に存じます。今後とも当センターにご指導賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター編集委員会

千葉友里香